武蔵野ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を楽しみながら学ぶ

聖火、武蔵野を走る

―市が五輪一色になったあの日―

いよいよ来年に迫った東京2020大会ですが、昭和39（1964）年のオリンピックで、聖火リレーが武蔵野市を走ったのをご存じでしょうか。オリンピック開会式前のあの日を振り返ってみましょう。

三鷹で聖火を引き継いだ正走者・村山憲一さん
降りしきる雨の中、聖火は消えずに無事市役所へ届けられた

「もはや戦後ではない」。昭和31（1956）年度の『経済白書』序文には、この一節が記されました。昭和20（1945）年8月の終戦から、10年間で目まぐるしい成長を遂げた日本。戦後復興の終了を高らかに宣言するスローガンとして、この言葉は当時の流行語にもなりました。

昭和30年代に入り高度経済成長期を迎え、「ますます発展・成長していこうと日本中が盛り上がっていた時に1964年の東京オリンピックは開催されました」と、元武蔵野市職員で、当時広報担当として聖火の送迎を取材した塩原恒文さん（88歳）は振り返ります。

10月の開催が迫った昭和39年9月、オリンピック発祥の地ギリシャ・オリンピアから運ばれた聖火は7日沖縄に到着。沖縄から鹿児島、宮崎、北海道の3起点4コースに分配され、約1カ月をかけて全都道府県を巡ることになります。武蔵野市を通過するのは、鹿児島から熊本など16県を回り、山梨、神奈川を経て来る最も距離の長い第1コース。10月8日に三鷹市から受け取り、市内に1泊し、翌9日に練馬区へ引き継ぐことになりました。都内のコースで聖火が1泊するのは、唯一武蔵野市だけでした。

市を挙げての聖火を迎える準備とオリンピックへの期待

オリンピック開催からさかのぼること2月。聖火リレーを迎えるにあたり市では、武蔵野市長を会長とした「オリンピック東京大会聖火リレー武蔵野市実行委員会」を設置しました。この委員会によって聖火リレー走者の選定、聖火祭の行事計画・準備などが進められていきます。

また都内では東京都主導による「首都美化運動」を推進中で、これに伴い「首都美化デー」などが設けられ、武蔵野市でも聖火リレーのコースや市の中央玄関口である三鷹駅北口周辺を重点地域として、清掃、花壇づくり、花の手入れや雑草の除去、違反ポスターの撤去、道路不正使用物の除去などを実施しました。当時の武蔵野市報を見ると「各家庭のお住まいの周辺もきれいにいたしましょう」と、市民にもまちをきれいにすることを呼びかけています。

また、三鷹駅北口広場や、聖火リレーのコースとなる通りには、約500メートルにわたって新たにガードレールが取り付けられるなど、着々と準備が進められました。

聖火台に点火する後藤喜八郎市長

聖火リレーのコースとなった中央大通りには
花壇が作られた

若い市長が聖火をかかげて走る姿は、感動的な一場面だった

さて、聖火リレーの走者は5月19

参考資料：『オリンピックのころの東京』岩波書店発行　著者・川本三郎

聖火に〝何か〟が起こらないよう寝ずの番をした。
一番左が塩原さん

市報 むさしの

聖火〝武蔵野〟を走る

昭和39（1964）年10月15日号の市報１面。
写真を撮影したのは当時の市広報担当の塩原恒文さん

日の会議で人選が終わり、市内在住の16歳から20歳までの走者69人が、4・5キロの距離を3区間（第1区間〈10／8むらさき橋～市役所〉、第2区間〈10／9市役所～第4分団詰所〉、第3区間〈10／9第4分団詰所～練馬境〉）に分かれて走ることになりました。現在、東京女子体育大学・短期大学の学長を務める浅見美弥子先生は、9日第2区間の副走者に選ばれた一人。当時16歳、藤村女子高等学校の2年生でした。

「私は4月に転校して来たばかり。その生徒を、聖火ランナーの副走者に推薦してくださった校長先生（伊澤やゑ子先生）に感謝の気持ちでいっぱいでした。陸上競技部に所属し、走り高跳び・混成競技を主に行っていましたが、陸上競技への情熱がさらに高まったのはいうまでもありません。国立競技場では、世界を舞台に活躍する女子走り高跳び選手の競技を目の前で見ました。その時の感動と衝撃は、今でも思いだされます」

聖火を迎えた10月8日はあいにくの雨。午後6時5分、むらさき橋で受け取った聖火は正走者・村山憲一さん（当時17歳・武蔵高校）の手に高々と掲げられ、市外からもつめかけた大勢の人たちが見守るなか市役所へと向かいます。どしゃ降りの雨の中での到着式。聖火はトーチから聖火皿に点火され、さらに安全灯にも分火し市長室に安置されました。

そして午後7時からの聖火祭。後藤喜八郎市長が聖火のトーチを掲げ、市営グラウンドを回ります。後藤市長はオリンピック前年の昭和38（1963）年に当選し、4期16年にわたり武蔵野市政を担い、吉祥寺駅周辺の都市計画の実施、下水道事業の推進、市民参加の市政など、現在の武蔵野市の礎を築く仕事をされた市長です。

「後藤市長はまだ43歳と若く、聖火の走者と同じ五輪のマークの入ったランニングシャツに白い短パン姿でグラウンドを一周し、聖火台に点火しました。観客席は市民で埋めつくされ、感動的でしたね。市長は普段からランニングで登庁するような方で、走る姿も堂に入っていました」（塩原さん）

この夜予定されていた藤村女子高等学校の生徒による模範演技、五輪音頭などの民謡舞踊は、雨のため会場を第一中学校の体育館に移し、盛大に行われました。

聖火を迎えることで、オリンピックに参加している

数人の職員が〝寝ずの番〟で聖火を見守り、迎えた9日。前日の雨にぬれた沿道は相変わらずの人の波で、人々の声援を受けて正走者・太田邦雄さん（当時17歳・成蹊高校）が走っていきます。

「狭い歩道の両側には、手旗を振って応援してくださる人で埋まっていたように思います。『頑張ってください！』という励ましの言葉が飛び交い、応援してくださる方々と一緒にオリンピックに参加しているように感じたことが一番印象に残っています」（浅見先生）

午前11時10分、第3区間の正走者・山崎義雄さん（当時19歳・海上電機）によって練馬区に無事引き継がれました。

翌日10日のオリンピック開会式。最終の聖火ランナーが国立競技場の聖火台に点火した様子を、武蔵野市民はどのような思いで見守ったのでしょうか。きっと「私たちが守り、送り出した聖火」という思いが、誰の胸にもあったのではないでしょうか。

取材・文／山口朋恵　取材協力／浅見美弥子、塩原恒文